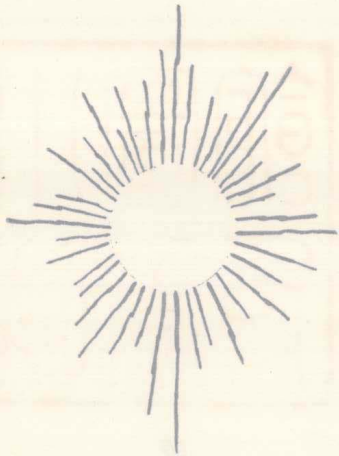
澤野久雄

さまよえる太陽

さまよえる太陽



澤野久雄

河出書房

さまよえる太陽

昭和40年9月15日　印刷
昭和40年9月20日　発行

著　者　澤野久雄（さわの ひさお）
発行者　河出朋久
印刷者　堀　鉄判
発行所　株式会社 河出書房新社
東京都千代田区神田小川町3ノ6
振替東京10802　電話（292）3711

定価390円
© 1965
印刷　文弘社・製本　小泉製本

落丁・乱丁がありましたら，おとりかえいたします。
著者との了解により検印廃止

さまよえる太陽

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

《1》

太陽はその日も、河向うに見える天主堂の尖塔の真上に昇った。

馴れないホテルの寝台が、唐津阿弥の眠りを妨げるのであろうか。それとも隣室に泊っている人の存在が、彼女の心を僅かに乱しているのだろうか。家にいる時なら、そんなに早く目醒めることはないのに、――昨日も今日も、そっとしのびこむ朝の気配におどろいて身を起すと、彼女はやわらかい絨毯を踏んで、素足のまま窓に近づくのだった。片手で額に落ちかかる髪をかき上げながら、もう一方の手で厚いカーテンの端をかかげる。すると彼女は、真先に見るのだった。あかい鬼灯のような太陽は、いま天主堂の尖塔をはなれようとしている。地表には、薄い靄が立っているらしい。まだ眠っているボン・ボイルの町は影絵のように音もなく静かで、目の下のラ

インの流れも藍の色が深く沈んでいた。

夜明けである。もう三十分もすれば、河にはさまざまな形をした貨物船が、それぞれの国旗をはためかせながら、せわしく上下しはじめるであろう。河畔につづくガス燈のはるかな列は、手前から一つずつ順に消えてゆくであろう。すると、散歩道のリンデンの並木が、次第に美しい緑をよみがえらせて来る。気がつくと、河の水はもうあざやかな青になっている。

しかし阿弥は、そういう変化を見るために、窓に立っているわけにはゆかない。もう少し眠っておかなければ、と、再びベッドに戻るのだった。

今日もまた一日、宮原慶太の案内をする予定である。彼は、どこへ行くと言うであろうか。何を食べると、言うだろうか。我儘な男ではなかった。五十歳はすぎているはずだが、気むずかしいところは少しもない。やさしい微笑が、いつも目の底を明るくしている。言葉も動作も、礼儀正しかった。別に、ヨーロッパに来たから、そう努めているわけではなかった。日本にいる時でも、そういう人であった。阿弥はこの人と会っている限り、自然、物静かな娘のようにふるまわねばならなくなる。そういう心づかいは、三年ぶりに会っても同じであった。しかし、三年前には同じ状態にあっても感じなかった心の疲労を、今度は身に沁みて自覚するのである。一日じゅう宮原慶太の身近にいて、たとえ五分か十分でも一人になる時間が出来ると、彼女は思わず肩を

おとして吐息をつくようであった。

阿弥は再びベッドにもぐり込んで、白いすべすべした掛布で丸い肩をつつんだ。目をとざした。が、そういう状態は、一分とつづいたであろうか。心臓が鳴っていると気づいた。何かに怯えているかのようだ。怯えたから、こんなに早く目がさめたのかもしれない。夢を見た記憶はないが、目醒めた時のおどろきが、いまもまだ確実に跡を曳いている。まるで、一人だけの部屋が、こわいかのようである。奇妙だった。白い天井、白い窓わく、そしてこれも白い扉。清潔だった。不要な装飾などはない。ホテル・ケーニッヒスホフといえば、西独の首都ボンでは、第一級のホテルである。そして彼女の与えられた部屋は、とりわけ美しい部屋の一つではないのか。鍵は、きっちりとかかっている。カーテンがゆれることもない。にもかかわらず不思議な怖れが、足の爪をひやしてゆくようである。

——まるで、この部屋のどこかに、誰かが隠れているようだわ。

と、彼女は焦点のきまらぬ目を宙にうかせながら、そっと呟いてみるのだった。

誰かが、見ている、——と思うと、それはもう一人の、阿弥であった。阿弥が、阿弥をみつめている。そういう意識も、不意に姿を見せた宮原慶太が、ひそかにもたらしたものかもしれなかった。

物思いが、また彼女を疲れさせた。疲れが、浅い眠りを招きよせた。靄の中を歩くような不安定な時間から覚めると、今度は陽が高かった。サイド・テーブルに置いた小さな時計は、八時半になろうとしている。朝食の約束は、九時である。彼女は急いで、ベッドを抜け出す。バス・ルームで、シャワーを浴びた。手早く身づくろいをした。階下に降りると、宮原慶太はロビイの椅子で、河を見ながら煙草を喫っていた。

広い大きな硝子の外には、明るいテラスが拡がっている。赤いゼラニュームが、いく株も咲き誇っている。そこから急な傾斜になり、ライラックの咲く崖になり、その下、河沿いの並木の梢ごしに、河を上下する船がゆるやかである。

「やあ、おはよう。」

ふり返りながら、そういう人に、

「お休みになれまして？」

「ああ、よく熟睡しました。ゆうべのワインが、いい具合にきいて……。」

「あのくらいで……あまり、お強くありませんのね……。」

不安定な、言葉の終りであった。会話のとぎれるアクセントではなかった。最後に、甘く補足すべきはずの主語が、カスタニエの花のように崩れおちていた。しかし、相手は気づかなかった

であろうか。
「でも、六時には目がさめました。この下の道を散歩して来ました。」
「あら。」
「やっぱりドイツですね。この下の船着場に繋いである小さな観光船の名前からが、ベートーヴェン……。」
「そうですわ、やっぱりベートーヴェンの生れた土地ですから……。町の広場に、ベートーヴェンの像があります。ベートーヴェンの家も、保存されています。あとで、御覧になります?」
もうひとこと、口をついて出そうな言葉が、また、咽喉の奥に残った。「小父様」という言葉なら、つけ加えてもよかったかもしれない。「お父様」といえば、親しすぎるだろう。「先生」と呼べば、無難ではあってもよそよそしい。
——日本にいた時は、なんとお呼びしていたかしら?
それをたしかに覚えていないという事実が、不意に阿弥の胸をゆすぶるのだった。前の日の夕方、ヴェッセリングの自宅の居間で、思いがけない宮原の電話を受けた時から、彼女はその用語一つのために、波立っていたようである。
五月なかばの、夕方であった。

阿弥の父親、唐津真吾は、三日間の予定でスイスに行っていた。父がいればその時間でも、ドアを叩いて来る患者の一人や二人はあるのだが、「三日間、休診」と書かれた紙が、珍しく戸口に貼り出されていた。急患の人は、近くの女医を訪ねるようにと、指示されている。家に残っているのは、阿弥と、看護婦のエリカと、女中のマリーアの三人だけである。

婦人雑誌を拾い読みしながら、電話のベルが鳴っていることを、阿弥はかすかに意識していた。しかしその電話が、自分に用事のあるものだとは、彼女は思わなかった。大学へ三年通って、退学したばかりである。家にいると、世間が狭くなった。特に親しい二、三の友達以外には、この頃では彼女に電話をかけて来る者もいない。

開け放されたドアから、エリカの顔がのぞいた。未婚のまま、三十をすぎた女である。

「阿弥……あなたに電話。」

「あら、あたしに……？　ありがとう。」

ばねのようにソファから立ち上りながら、一瞬、誰かしら？　と思った。父の留守ちゅうだけは、誰とも会う約束をしていない。が、

——誘いがあれば、出かけるわ。

と思ったのは、父のいない家の静かさを、いくらかもてあましていたからかもしれない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「どこからかしら？」
呟きながら、ドアを出た。ドアのすぐ外に小さな台を置いて、電話器がすえられている。
「もしもし、阿弥ですが……。」
習慣で、なめらかにドイツ語が口をついたが、
「やあ、阿弥さん……。僕、宮原です。宮原慶太です。」
「あッ！」
と、彼女は言った。それからあわてて日本語になって、
「まあ、思いがけない。ようこそ。いま、どちらに……。」
「ケルンの飛行場についたところです。突然で、おどろかしては悪いと思ったが、つい懐しかったもので……。」
日と共に遠くなっていたものが、一瞬、目の前に立ち返って来たようであった。相手の言葉に、年に似合わぬ遠慮があると気づくと、
「ちょっとお待ちになってらしって……。お迎えにあがりますわ。」
「とんでもない。あなたに来て頂いては……。」
「御心配なく。あの頃のあたしとは、ちがいますもの。」

なぜ、阿弥はそんな言い方をしたのだろう。飛行場のレストランで、必ず待っていて下さいと、彼女は言い添えた。急いで着がえると、エリカには、マリーアと二人で先に食事をするようにと言った。日本からのお客様だから、今夜はどういうことになるか分らない。幸い、父親が飛行機で発って行ったから、車は車庫に眠っていた。白い中型のタウナスである。走らせれば、ケルン・ボンの飛行場まで、三十分もあれば充分であろう。急いで階段を駈け降りた。裏手の車庫の戸を、力いっぱいに撥ね上げた。その拍子に、車庫の屋根をなかば覆うようにして開いている白いカスタニエの花が、夕闇の中ですでに翳って来ていると気づいた。翳った白の中に、彼女は改めて宮原次郎の顔をよみがえらせた。慶太の息子である。阿弥の兄、行一の友達で、もう三十歳に近いはずであった。

三年前、阿弥が母親の急逝に会わなければ、――そして単身、ドイツの父を訪ねて来るようなことにならなければ、彼女はすでに次郎と婚約していたかもしれない。あるいは結婚を目の前にして、娘らしく胸をおどらせていたかもしれない。それが、思いがけない母の死で、彼女の道は不意にカーヴを描いた。

「二、三年、父のところへ行って来ますわ。父も、だんだん年ですから……。」

父から誘いのあったことは事実だが、決して自分のためにとは言わなかった。遠い異国で初老

を迎える父のために、ということになっていた。帰って来たらどうすると、約束をしたわけではない。が、ドイツに渡ったまま、そのままになる間柄とは、彼女も次郎もその時は思わなかった。ところが、離れたままの月日が重なると、はじめのうちは頻繁だった手紙のやりとりも、月に一度になり、三月に一度となった。そしてそうなったことを、悔みもしない阿弥になっていた。

宮原慶太の登場は、そういうひそかな疎遠の中で起って来たことなのだ。両側に高い並木のつづく、真直ぐな小暗い、ハイウエイに車を走らせながら、彼女はかすかな狼狽の中にいる自分を、発見しずにはいられなかった。

ケルン・ボン飛行場は、ケルンとボンとの間にある。二つの町の名を重ねて呼ばれる飛行場だが、阿弥が白いタウナスを、そこのパーキングまで乗り入れた時には、初夏の日ももうすっかり暮れてしまっていた。

建物を入り、長いカウンターの前を、急ぎ足で通りぬけた。つき当り、搭乗客のぬけてゆくゲイトの右に、小さなレストランがある。左手、建物の外にもまた別のレストランがあり、その前の庭には色とりどりの日覆いのパラソルを立てた卓子が、何十となく散っている。そこからは、飛行機の発着がすっかり見える。乗る人、降りる人の姿も、昼ならば振る手も見える距離である。いまもそこに、何十組かの客の姿が散っている。が、彼女はとりあえず、近い屋内のレスト

ランを覗いた。
「やあ、阿弥さん、立派になったなあ。」
こちらが宮原を見つける前に、相手から声をかけられたのは負けであった。卓子の横に大きな旅行カバンを一つ、その上に小さなショールダー・バッグを重ねて置いて、宮原慶太はコーヒーを飲んでいた。
「まあ、しばらく……。」
お元気か、どうしている？　お父さんは？　あなたも、ドイツ語がうまくなったろうね。
物静かな人には珍しく、次々に言葉を重ねながら、ウェイトレスを呼んで金を払うと、
「おや、折角来てもらいながら、お茶もあげなかった。」
「いえ、ホテルへいらしってからでも、ゆっくり……。」
宮原は、ストックホルムで開かれる言語学会に出席するために日本を出て、パリを経由してドイツに着いたところだという。ボンに、ホテルは予約してある。世話のやけぬ客である。阿弥は自分の横に宮原を坐らせて、来た道をまっすぐに戻った。ホテルに着いてフロントに立つと、
「どう？　帰ってもお父さんがお留守なら、僕と一緒に泊らないか？」
「そんな……ここから二十分で帰れますのに、こんないいホテル、勿体ないわ。」

「いや、久しぶりでお会いするんだ。ドイツの話でもきかせて下さいよ。」
旅行シーズンに入っていると思うのに、偶然、部屋はあいていた。キャンセルでも、あったのであろう。五十すぎと見えるフロントの男が、並んだ番号の鍵を二つ、微笑もない顔でカウンターに置いた。二人は一度、それぞれの部屋へ入り、再び廊下に出ると、連れ立って食堂に降りた。宮原はラインの葡萄酒を、おいしそうに飲んだ。
「次郎さんは……なんて言っては失礼ですけど、相変らず?」
いくら疎遠になりつつあるとは言っても、その動静を少しも知らないわけではない。しかし、それよりほかに言いようがなかった。
「そう……。あなたが変ったほどには、変らないでしょう。」
「あたくし、変りまして……?」
「そりゃ変るのが当然……。生きているということは、変りつつあるということです。」
卓子には、厚い硝子で覆った蠟燭がついていた。炎がかすかに揺れるから、宮原の顔にも影が動く。いくらか赭味(あかみ)をおびて見えるが、それは蠟燭の火のせいであろうか、それとも葡萄酒の酔いもあるだろうか。旅先で、陽にも焼けているのかもしれない。三年前よりは、たしかに老けた。が、その老けた表情の中から、五十男の心のたたずまいを見ることは、二十一歳の娘にはむ

ずかしかった。

——それならば、あたしのことも捉えにくくなっているだろう。

助かった、と思った。といって、別に宮原を、宮原の息子を、裏切っている積りはない。表立った約束があるわけではなかった。しかし、ドイツで医業に従って、すでに十何年になる父に、生活の本拠を日本に移す気持は少しもない。すると阿弥にも当分の間、帰国する予定は立たないわけだ。

隣りの卓子で、スペイン人と見える中年の夫婦が、食事を摂(と)っていた。時々、こちらを見て囁き合う。宮原と阿弥とを、親子と見ているのだろうか。話し声はきこえないが、好意的な目である。

——ことによれば、「お父様」と呼ぶようになったかもしれぬ人だわ。

あるいは日本にいる頃、次郎を訪ねて慶太と同席すれば、彼女はその時、すでに「お父様」と言っていたかもしれない。思い返してみると、果して慶太のことをなんと呼んでいたか、記憶は少しも残っていなかった。その記憶だけ、脱落していた。そして今は「お父様」とも、「小父様」とも言いにくい。

「次郎さんも一度、御一緒にいらっしゃればよかったのに……。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com